
漆黒の館と変人...そして異能者

楼月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漆黒の館と変人…そして異能者

【Nコード】

N9001Y

【作者名】

楼月

【あらすじ】

幼い頃最愛の兄を事故で亡くし、両親も他界した少女、柳田朱音^{やなぎだ あかね}彼女の思う事はただ一つ「兄は何故死んだのか、どうして死んだのか」。そんな彼女の側にはいつも普通の人間とは違う空気を持った少年少女が居た。黒魔術大好きな少女。ケンカ、遅刻、サボりが当たり前前、5日でその地域をシメたと言う伝説を持つ不良。凄腕のゲーマーの少年。（実はハッカー）

朱音はこの少し変わった3人とごく普通の？生活をしていた。

しかしある日、朱音はとある噂を耳にする。

「どんなに不可能な事でも叶えてくれる店があるんだけど、誰も場所を知らないんだって」

それから数日後、朱音の家にいかにも怪しげな男、四月一日・陰影^{わたぬき・いんえい}が現れたた。

少女

過去というモノは幸せなモノばかりではない。

時に残酷でどんなに逃げてても逃げてても必要に追いかけて来る。

だからといって過去に戻ってやり直せる訳でもない……そう、そんな事分かってる、分かってる…

嫌と言うほど自分に言い聞かせて来た。だからこそ、余計に思ってしまうのだ。

もしも、もしも、過去を変える事が出来たとしたら…過去に戻れたなら…

「…っ、バカらし」

最近の私はいつもこうだ。叶いもしない夢を見て、あの人を思い出して涙を流す。

なんだか、自分が情けなくて笑える。…なのに涙が止まらない。

過去、過去、過去過去過去過去

頭の中でぐるぐると回るその言葉はまるで呪いのように少女を苦しめる。

薄暗い部屋の中で少女の
泣き声だけが小さく響く。

そして、夜はふけていった…

悪夢（前書き）

少女の悪夢、そして日常

悪夢

その晩、私は夢を見た。小さい頃の。

私の隣には兄が居て、見慣れた街を歩いていた。私が兄の手を握ると、兄は微笑んでいた…様な気がした。逆光で兄の顔が良く見えな
い、けど照れくさそうに笑っていて、こんな日々がいつまでも続
く
と思っ
た…

だが、その瞬間、私の目の前が真っ暗になった。

『…………お、兄ちゃん？』

いつの間にかさっきまで隣に居た兄が居ない、それどころか街の風
景も道を行き交って居た通行人も誰一人として居ない。

真っ暗になった音も無い世界に居る私。

『お兄ちゃん？何処行つたの？お兄ちゃん！』

いくら呼んでも返事は無い…

その時だった、

『キキーツ!!!!!!!!!!!!』

「……………!!!!!!」

そこで、目が覚めた。

「ハアハアハアッハア…」

時刻は午前5時半。

最悪の目覚めだ、またあの日の夢を見てしまった。身体中真夏でも無いのに汗でびっしょり。頭がガンガンして、目の前がくらくらする。吐き気まで込み上げて来た。

「み、水、飲みたい」

喉が渴き過ぎて、水を飲み台所に向かった。

「……………はあ」

水を飲んだおかげなのか、だいぶ落ち着いてきた。でも、さっきの夢の光景を思い出すと、目眩がしてくる。

こんな朝が最近よくある。だからといって慣れる事は無い。寧ろもう二度と見たくない。

しかし、こんな事をいつまでもしてられない。
学校に行く支度をしなければ。

「ふー、……………よし!」

学校に行く事に意識を切り替え、支度を始める。

これが、柳田 朱音の1日の始まりである。

悪夢（後書き）

前回は、前書き状態で分かりにくくてすみません（ ; ）

これから、頑張って書きたい！！と思います！！

小説初心者の小説ですが、良かったら次話も読んでやってください。

人間関係

名前 柳田 朱音（やなぎだ
あかね）

性別 女

年齢 17歳

職業 高校生

趣味 特に無し

特技 スポーツ（バスケット） 格闘技

好きな食べ物

甘い物 コーヒー

嫌いな食べ物

山葵（辛い物） パセリ

好きな言葉

「日常」「一期一会」

嫌いな言葉

「別れ」「永遠」「自己中」

家族構成

父 柳田やなぎだ 勝吾かちご
母 柳田 千春 (やなぎだ ちはる)
兄 柳田 伍流 (やなぎだ いつる)

父勝吾、母千春は10年前、通り魔により殺害され、兄伍流はその半年後、事故で他界。

柳田 朱音は僅か7歳にして家族が居なくなり、親戚の家を転々としてきた。

これが、柳田 朱音のプロフィール。一見聞いただけでは、まさに悲劇のヒロイン的存在になるだろう。だが朱音は小さい頃から明るく人付き合いも良い。だが、消して媚びを売るような事はしない。そんな性格のせいか彼女の周りにはいつも誰か居た。

まあ、それが普通の人間なら良かったのだが…

彼女の周りに居る人間はいつも「何処かおかしい」人間ばかりだった。たとえば、小4、5年の時はゴスロリとロリータのフリフリの服を着た2人がいつも側に居た。それも物凄く可愛い。まるで、人形のように愛らしく朱音とは真逆の存在だった。ここまでならまだ良い。まだ良いのだが…

実はこの2人は「男」なのだ。

(はい、いま「はあ？」って思った方拳手！)

何処からどう見ても「少女」なのに実は「少年」
彼らも朱音の周りに居た「何処かおかしい」人間の一部分である。

実はまだまだいる。

中学の時は真っ黒なフードをかぶり、いつも怪しげな本を持ち歩いていて、「私は黒魔術が使える」と言っているおさげの少女、黒縫井・真子くろぬい・まこ。それに、ケンカが強く生徒や教師からも恐れられている不良、翡翠・絢也ひすい・あやそんな彼は当然朱音と関わる様な人間ではない。なのに彼は何故か朱音の側に居る。本人いわく朱音の存在を気に入ったらしい…（注意、恋愛感情ではない。ここ重要！）

はたまた、恐ろしい程凄腕のゲーマー、一ノ瀬・飛李寺いちのせ・あいらいつもヘッドフォンをして表情を表に出さない基本無口な少年。でも、何故か朱音や真子、絢也の前では時々だが表情に出る時がある。（大声では言えないが実は飛李寺、凄腕のハッカーである。中学生だけど）

朱音の周りには彼らの様に何処か普通の人間とは違う空気を持った少年少女がいつも居た。

朱音本人も彼らを嫌う事なく普通の友人、いや親友の様な存在として接して居た。

いつしか、影ではこの4人の事をこう呼ぶ生徒が居た。

「朱音組」

だが、「朱音組」と呼んだ生徒は絢也に目を付けらそれいらい呼ば
なくなつたらしい…

そこには、黒色とそれに似合わない程のあかるい笑顔。

「おっはよー！！朱音さん！」

制服似合ってるね！一瞬誰か解んなかったけど、私の目は誤魔化せないよ！！」

そこに居たのは、黒いマントを被り、髪をみつあみにした眼鏡の少女、黒縫井・真子が居た。

「いや、誤魔化す気なんて毛頭ないし、ってか真子！突然飛び付くのビックリするからやめろって言ったつしょ！」

「えへへ。だって朱音さん見つけると飛び付きたくなるんだもん！」

「それ、理由になつてんのかな？」

外見とは裏腹に明るい声。子供の様な明るい笑顔。ここまでは良い、ここまでは良いんだ、これだけ聞けば普通の少女より明るい少女だ、たとえ三つ編みで眼鏡をしていてもギャップがあつて寧ろモテるかもしれない。

だが、問題は彼女が着ている腰まである長さの黒いフード着きのマント、そして片手に持っている分厚い怪しげな本。その本の題目は「黒魔術と召喚術」……

（はい、今ちょっと引いた人！正直に挙手！）

黒いマントに黒魔術の本、そう皆さんご想像の通り真子は大の黒魔術好き、というか真面目に黒魔術を信じている。

（はい、今「うわー痛い」って思った人！真面目に挙手！）

「ねー速く行こ朱音さん！飛李寺はともかく、絢也がぶちギレちゃ
うよー！」

「んーあーそうだね。絢也がぶちギレると面倒だし」

そんな真子に腕を引かれつつ歩き始める朱音。

他の人からみれば異様な光景だが朱音としては当たり前前の日常。

たわいもない話をしながら学校に向かう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9001y/>

漆黒の館と変人...そして異能者

2011年12月29日17時45分発行